

CIGS 国際シンポジウム

「地球温暖化の科学的知見と欧州における政策」

杉山大志

「地球温暖化の環境影響についてのコメント」

【講演要旨】

日時：2018年10月1日（月）14：30～17：00

会場：新丸ビルコンファレンススクエア Room901

杉山大志（キャノングローバル戦略研究所 研究主幹）：

パイザー氏がプレゼンテーションでおっしゃった予測の幅について補足する。CO2濃度が産業革命前に比べて2倍になったときの温度上昇は、1.5度と4.5度の間だというのがIPCCの最近のレポートである。このように予測の幅は極めて大きい。パリ協定の2度を十分下回るといふ目標はこの上限の温度上昇予測が正しいと仮定した場合であっても2度という目標を達成するということである。この高めの温暖化の予測の正しさ、過去の気候の確かさについてもよく分かってない中、このような高めの予測に基づいて行動することに、一定の議論の余地があるという問いかけがプレゼンテーションの内容であったと理解する。

地球温暖化が起きると猛暑は増える。これはIPCCも明言し、常識的に考えてもそうである。暑くなると豪雨は増える。温度が高くなると大気中に蓄えられる水蒸気の量が増え、大雨が降りやすくなる。これをクラウドジウス・クラペイロンの式という。

このクラウドジウス・クラペイロンの式を信じると、どのぐらい豪雨が増えるかということ予想できる範囲になる。豪雨が増えても人が住めなくなるような話ではない。なぜなら、人は多様な気候の下で元から暮らしてきたからだ。例えば、東京より1度か2度低い温度の福島の温度が1度か2度上がったら、福島の豪雨の強度は東京並みになるということだ。

過去にも温暖化は起きている。気象庁の観測データであるが、地球温暖化で1℃、都市熱で2℃、東京の温度は合計3℃ほど上がっている。札幌、福岡、大阪、名古屋、他の大都市も2℃ぐらい、過去100年ほどの間で上がっている。都市の影響があまりない日本の周辺の海域などでは1℃ぐらいの上昇であった。

我々は温暖化の悪影響を殊更心配する向きがある。しかし、この過去100年間のデータから、案外うまく適応してきたことが分かる。住まい方の工夫や農産物なども含め人間は温度が上がってもそれに慣れて、順応することができるのだ。

豪雨に関しても同様のことがいえる。過去100年に地球温暖化が1℃おきて、大都市ではもっと高くなって豪雨は降りやすくなっているが、国交省がまとめるデータでは水害による死者数は一貫して減少している。その理由は災害への対策である。堤防を築き、ダムを造り、あるいは観測し、予報し、警報を出す。このような防災のシステムの発達が死者数の偉大な減少を実現させた。さらに、このことは1℃の温暖化のなかで起こったのである。

このさき地球は温暖化する。豪雨はそれに応じて増える。一定の災害対策の強化は必要である。しかし豪雨増加の結果を悲観する必要はない。なぜなら過去にこれだけ見事に対応した実例があるのだから。

以上